

第2回 中国圏広域地方計画学識者等会議 意見要旨

■日時：平成27年2月26日（木）15:00～17:30

■場所：中国地方整備局建政部3階会議室

議題

- 1) 個別ヒアリングにおける意見の概要（中間）について
- 2) 広域地方計画の見直しについて
- 3) その他

（配布資料）

資料1 個別ヒアリングにおける意見の概要（中間）

資料2 中国圏広域地方計画の見直し概要（案）

（参考資料1）第1回中国圏広域地方計画学識者等会議意見要旨

（参考資料2）新たな国土形成計画（全国計画）中間整理概要及び中国圏広域地方計画 目次構成

1. 開会

挨拶（中国地方整備局 尾藤局長）

2. 議題

1) 個別ヒアリングにおける意見の概要（中間）について

事務局より個別ヒアリングにおける意見の概要（中間）の資料説明。

【各委員からの意見】

新井委員

- コンパクトシティに関する議論というのは相当気をつけないと、誤解されている面もある。合併前の旧市ぐらいで市街地をコンパクトにするということと、編入町村などに対しては小さな拠点をしっかりつくっていくということ。

沖委員

- 市町村長さんの意見において今のお話（P3 戸田委員の2つめの意見）に関係するような内容が書かれている。東広島市では、コンパクトシティの考え方そのものは否定しないが、一律にコンパクトではなく、都市規模を見据えた最適化を図り適正に誘導すべきという意見である。現実問題としてどういうふうに誘導していくかというのが、次のステップで非常に重要なところになってくる。

桜井委員

- ヒアリングの分析の仕方について、中山間地域とか瀬戸内側と太平洋側とか、単純に市町村の人口規模でやってみるとか、多面的に活用してはどうか。大都市と中山間地域では自ず

と違ってくるのではないか。抱えている事情が全て違うので、その中で政策の優先順位を考えていかないと、多様性を否定することになりかねない。優先順位をつける上でもうちよっと細かい形での優先順位の付け方も視野に入れていただいた方が良いと思う。

→事務局

今日のまとめは途中段階の一次まとめであるが、全部揃ったら、例えば大きい都市と小さい都市で出ている意見にどういう違いがあるか、山陰と山陽で意見の違いがあるかなど、色々な形で、ご指摘の点を踏まえてアンケートの分析をやっていききたい。

佐藤委員

○コンパクト+ネットワークというのはいったいどういうエリアを想定して、それぞれの構成する行政体にどのような機能を持たせるということを念頭に置いておられるのか。

→事務局

国土形成計画の検討の中では、コンパクトの圏域を非常に広い範囲で捉えたり、狭い範囲で捉えたり、重層的に捉えられている。合併前の旧市町村単位、小学校区単位など様々な範囲内でのコンパクトを重層的に重ねていくというような説明の仕方をして

いる。

○どこに住むかについても、住む人たちが最も自分にとってメリットのあるところに移動していくだろう。そうなる何らかの政策誘導などしない限り、いくら言ってもそれはできないのではないか。

○上位、中位とランクを付けたとして、どの地域を人々が生活する場として選ぶかという、色々な条件で考えれば上位地域の方が良いと思うのではないか。人々がバランスよく重層的な地域構造の中に住んで生活していくのかというところがなかなか見えてこない。

→事務局

都市が拡大していくときには、線引きなど規制的な手法で都市形成を図ってきた。これからの人口減少時代には、コンパクトということをやらなければいけないとする、基本的には魅力的な拠点をつくってそこに誘導するという。右肩下がり、減少時代における行政の政策は、何をやってコンパクトにするのかという、誘導的な方法でというのが基本的な考え。

○ご説明いただいた内容はよくわかるが、ただ一足飛びにそういう形に行かない。少しずつ減りながら集中していく。残ったところでは依然として生活している人もたくさんいる。そのあたりの対策とコンパクトシティをつくっていくという政策とはどのように整合性を持ちながらやっていくのか、お考えがあれば聞きたい。

→三浦座長

次回までに検討していただくことにしたい。

戸田委員

○重層的というのは、中心地理論というドイツの地理学（中心地理論）の考え方に立脚している。都市の階層レベルに対応して拠点をつくっていき、その拠点をそれぞれのところが利用できるようにネットワークで結ぶ、という考え方である。

○コンパクト+ネットワークは概念モデルであり、実際に適用する場合にはプラス、マイナスがあると思う。マイナスをなるべくなくすように留意しながら集約していくなど、実際にあてはめる段階で考えていくこと。一般論で回答することはなかなか難しい。

○このヒアリングも、国土のグランドデザイン 2050 をベースにしている。広域計画は 10 年目標だが、2050 年をベースにして本当に良いのか。国において 10 年後の計画はないのか。我々は 2050 をベースにして見直しをするのかどうか。

→三浦座長

次の議題の後にまた色々議論をお願いしたい。

三浦座長

○山口県に住んでいるが、コンパクト+ネットワークというのはよくわかる。なぜコンパクトかという、もう行政のサービスが追い付かないから。行政サービスをきちんとするためにはコンパクト化は避けられない。行政サービスを良くするためには誘導的な政策で人をできるだけ集めて、効率良いサービスができるような形にして、補足的なところは他のところにスムーズに行けるもしくは情報がうまく通うようにして、色々な便利な生活を享受する、そういうことかなという気がしている。

2) 中国圏広域地方計画の見直し概要（案）について

事務局より資料 2 説明

【各委員からの意見】

《中国圏のポテンシャル及び現状と課題について》

新井委員

○5 ページ目の従業員一人当たりの製造品出荷額の推移で、中国地方が日本の中で一番高いということは、生産性がものすごく高いということか。どういう原因があるのか。

→事務局

基礎素材型産業が多いことが原因だと考えている。

○鳥取県では県、基礎自治体も含めて非常に手あつい支援策を実施している。受け入れ先の町側も住民主体で色々な取組が活発に行われている結果ということ。支援策という意味ではお金というところもあるだろうし、住居を斡旋するとか仕事を斡旋するとか、新規就農者

に対して補助をするというところもある。東京や大阪で相談を受け付けて非常に緊密にやりとりをしてやっている結果ではないかと思う。

○震災とか失われた20年を経て、若い人たちの考えは我々の世代からは劇的に変わってきている。地方出身で地方の国公立大学へ来るような学生はそこに残りたいという志向が圧倒的に高い、定着したいが仕事がないからいやいや大阪とか東京へ、という感じである。

○人口減少とその対策というのが、これからの日本の国策として相当重要な部分になっている。鳥取県や島根県での取り組みのように、子育てしやすい環境などあれば移住者も増えるし出生率も上がっていくという現象が起きてくるのではないかと、そのあたりも考慮していただければと思う。

沖委員

○転入者増加の兆しのところで、移住者数のランキング2013は鳥取県が1位、島根県が4位となっているが、ここまでするには何か理由があると思う。その辺のところがこれから活かせるものなのかどうか、よくわからない。

→事務局

今日の資料には順位しか書いてないが、実際に移住してきた方がそれぞれの地域にどんな魅力を感じて来たかという情報についても整理してご提示できるようにしたい。

○岡山大学は地元が約3割ということで、県外から来ている人が多いので、やはり考え方が違う。意欲があって、大都会に出て何かしてこようというのではなく、若い時に少しシティボーイになりたい、という感じで企業を選んで出ていく者が多い。一方、行政関係になると、あまり全国を動かずに地元で暮らしたいという形で、パターンに多様性がある。

作野委員

○世代によって地域によって、「発展」のイメージが異なっているだろうが、広域地方計画においては一定の見解を持つ必要があるのではないかと思う。9ページの県民所得や市町村民所得の図はこの通りであるが、これを格差と見るのか、差異と見るのか。田舎暮らしにはそんなに金は要らないので、経済的所得が低いから不幸ということではない。所得を増やすような政策はもう時代遅れ。一方で、買い物とか医療とか、暮らしを守っていくものは必要である。中国地方こそ、都市的な価値と中山間地域的、田舎的な価値が共存できる地域だと思う。

桜井委員

○ポテンシャルということで、東アジアとの近接性ということが一番上にあげているが、東アジアとの近接性を活かした経済・文化交流の現状分析と将来的な可能性というものが何も示されていなくて、それをどう捉えて良いかわからない。中国圏全体として捉えるものなのか、一部山陰として捉えるものなのか、どういう捉え方をして考えて、この計画の中で

位置付けるのかというのが不明だと思う。

→事務局

今こういう柱立てをして、次に具体的な話を書きこんでいくときに、今ご指摘があったようなところの分析は当然必要だと思っているので、次の書き込みをしていく際に、データなどよく見た上でご指摘にお答えしていきたい。

佐藤委員

○2 ページ目に近畿、九州、四国の3地域に隣接するという形で横に矢印が2本描いてある。下の方が山陽自動車道の沿線、上が山陰道関係だと思うが、中国縦貫道はどのような位置づけなのか。将来推計においても中国縦貫道沿線は人口減が一番大きいところであり、ここをどうするのかという視点が必要。

14 ページの産業集積の図を見ると、集積しているのは山陽自動車道沿線、瀬戸内海沿岸。もう一つは島根県の松江あたりで、そこから矢印が来て、中山間地域で経済循環が起きるのかのごとくイメージを与えているが、そのための具体的な対策は何なのかという検討がないと思う。中国地域の均衡ある発展、あるいは20年後30年後の発展を考えたときに、もう少し戦略的なトータルとしての考え方というものも持って示しておかなければ、実際には動かないのではないかな。

→事務局

ご意見を踏まえて検討したい。

→三浦座長

国交省の中での検討、他省庁にも関連する検討事項があったと思う。ぜひよろしくお願ひしたい。

○中国地域は、四国、九州、近畿地域と産業の取引も含めて関係が深い。産業連関で考えた時にどれだけのリンクを持って四国、九州、近畿地域とリンクしているのかということのデータをわかりやすく示していただく必要がある。それが見えてくれば中国地域としては将来20年後、30年後にどのような産業政策も含めてやっていけばいいかということが見えてくると思う。

さとう委員

○主婦の起業も、地方でこの土地でやりたいという方が多い。小さいけどなくてはならない企業はかなりあるような気がするので、そういう魅力をもっと訴えたい。震災以降、東京から広島、中国地方に移住して来られているケースが多くて、広島は割と安全で温暖なところで、子育ての地域として選ばれている感じだ。10ページの土砂災害の危険箇所数などで上の方になっているが、危機感は持ちつつも割と温暖なところという特徴付けもできる気がする。

○道路やインフラの整備も必要だが、子育てに必要な下水道などの環境とコミュニティという人間関係は必要な気がする。

戸田委員

- 2 ページの図においては、中国縦貫の軸もあるし南北の軸も、もうちょっときちんと描いた方がよい。南北と中国縦貫を加えたら結節点がたくさんできる。そこを基軸に中山間地をどうやるか、施策につながっていく。
- 全体として地元志向が強まっているのは事実。また景気によっても違う。景気が高揚すると大都市に行く。だから今は大都市は増えている。不況になると地元が増える。

西河委員

- 中山間地域に魅力があるというのは私たち世代、また下の世代も震災以降気づいている。実際に東京の金融業界などいろいろなところの第一線で働いてきた人たちが、田舎で起業したりしている。東京にしながら自分の故郷に対して何かしたいと思っている人は結構いるが、自分たちのスキルを地方に役立てられるような仕組みがあるといいかなと思う。

三浦座長

- 学生が就職する時にどうしても東京に行きたがるが、学生は初任給と福利厚生施設を重視する。ある程度年をとると地方の価値がわかるし、作野先生が言われたことは非常に大事な観点だと思う。
- 起業できれば地元でやりたいという学生も増えている。地元で働きたいと言う学生も間違いなく増えているが、仕事が見つからなくて都会へ行く学生も確かに多い。
- 防災面では、住宅は尾根沿いに造らないといけないということも、防災教育の一環として、安全な中国地方を実現するためには必要だと思う。女性なり色々な人が起業するに当たって、国土計画という立場から言うかどうか、支援があればもっと実現しやすくなるのか。

《中国圏の将来像、圏域整備の基本戦略とプロジェクトについて》

新井委員

- 中山間地域や島嶼部を含めて、そこで生活する人が幸せというのはもちろん一番大事だが、それだけでは維持できない、外とつながったりネットワークを持っていかないと。それによって移住者が入ってきたり二地域居住者が入ってきたり、若者が入ってきたりということなので、外とのネットワークを持てるとか、この辺の言葉を考えていただきたい。

→事務局

中山間地域などでの人口減の問題は、今住んでいる方々に痛みが出ないように、小さな拠点を構築するという考え方と、一方ではやはり大都市圏から人に来てもらうと方

法もある。二つあるにも関わらず、ここの表現が、そこに住んでいる人よりもむしろ来てもらうということだけ強い表現になっている部分があるかもしれないので、表現については検討させていただきたい。

磯部委員

○転入者が多いという話も出てきたが、若い世代とリタイア後の高齢者とではかなり違うと思う。若い層は仕事の方に重点を置いた捉え方をするだろうし、高齢期の人たちはくらしの方に重点を置くだらう。保育士、栄養士を育成していたが、そこでの問題は若者の地元志向は強いが中山間地に就職口がないこと。子育て期に職を離れ、子育てに専念することも良いことだとは思いますが、キャリアを子育て後に活かせるような環境を人材育成の中で考えていく必要があるのではないかと。医療、福祉の面で人材育成とまちづくりとをつなげていただきたい。

江里委員

○もう少したくさん人づくりのプロジェクトがあるのではないかと。高齢者が活躍できるところとか、若い人と高齢者が一緒になってやれるところ、それから子どもたちにもできるところがあるのではないかと。そういったところを加えていくと地域の魅力にもつながるのではないかと思う。

沖委員

○中国の大学の先生が、汚れていた瀬戸内海がここまできれいになったということで、わざわざ調べに来られたことがある。今は逆に少しきれいになりすぎて、里海にならなくなってしまった。誰のための資源であり、誰のための海なのかということをもとに受け止めた形での整理をお願いしたい。

作野委員

○そこで暮らしている人たちが幸せに生きていることが大切であり、「大都市圏を惹きつける中山間地域や島嶼部を創造する中国圏」と書かれているが、なぜ大都市圏を惹きつける必要があるのか。ここは「暮らしを大切に作る中山間地域や島嶼部を創造する中国圏」というような趣旨が大事なのではないか。また、3の(1)③の「人口ダム」については、人口ダムという概念が適切かどうかというのは、検討が必要だと思う。

○人口減少対策については守りと攻めで整理すべきだと思う。今住んでいる人がくらしを維持するという観点、これは守りであって、当然必要。同時に、よそから来てもらうのではなくて、中山間地域、中国地域に価値があったり魅力があるから移住者が出てくる。大都市等から人が来るという動きそのものは当然受け入れるものだと考えている。

桜井委員

○個別の小さい島とか、地域ごとでの魅力は非常にあると思うが、瀬戸内海と言っても一つの

イメージを描きにくいところがマイナスかなと思う。瀬戸内海の再生や環境整備、それに里海は、世界的にも注目されており、そういうところをもっと情報発信して瀬戸内海のイメージ形成をしなければいけない。

さとう委員

○四国では、IT関係の企業などが空き家を使って起業している。起業ということを中国地方だからこそ、空家を使って推進していけないか。

戸田委員

○将来像の(4)はわかる。(1)は、内部の圏域構成と外の関係づけの議論が両方入っている。内々の交流連携、外との交流連携が一緒に入っている。(2)は産業集積、地域資源、本来は内発的、インバウンド観光も議論している。(3)については中山間地域や島嶼部を磨こう、魅力をアップしよう、それでもって外との関係づけをしようということで、これらは一部整理する必要があるのではないか。内を磨き内部循環を高め、外からあまりものを買わない、しかしながら外との関係性を良くして人にたくさん来ていただく、売り込む。そういうことが一般的な地域振興の戦略だ。そこが一個の項目の中で二つ入っており、そこを整理してはどうか。瀬戸内海については、四国との関係づけをもう少し明確にしないと議論できない。

→事務局

広域地方計画自体がどちらかというとあまりフィジカルな、絵を描く計画ではない中で、具体的に何をしていくのがいいのかというのは、戦略とかプロジェクトの部分になる。将来像については、(1)では連携や交流が活発に行われているような中国圏で、(2)では産業なり地域資源が非常に活かされて成長している中国圏、(3)では中山間地域が元気で魅力的な中国圏ということ。具体的にどうするのかということでは、地域の中での取組とか、対外的にやる取組とかについては、戦略・プロジェクトで整理する。

西河委員

○作野先生が言われるように、移住者は来ちゃうというように思われる。くらしの中にずっとあったお地藏さんや滝というのも、日本の魅力、海外の人が喜んでくれる魅力のような気がするので、来ちゃいたくなるような中国圏の発信の仕方ができたらいいと思う。

三浦座長

○最近NHKが瀬戸内海の魅力、美しさを取り上げ、よく番組を放送している。瀬戸内海は自然そのものはエーゲ海よりはるかに美しいと思うが、もう一つ、垢抜けていない気がする。それが垢抜けると瀬戸内海の美しさはエーゲ海にも勝るのではないかと思う。

○情報の共有が非常に重要になってくる。情報インフラの整備、総務省との連携、県の行政とも色々関わりがあると思う。人づくりは難しいが非常に大事だ。文部科学省がCOC+と

いうプログラムを出しており、地元の高校生が地元の大学に進学するよう、地元の企業に就職するよう、教育プログラムをどう作るかとかに取り組んでいる。

《全体を通じての意見》

新井委員

○今まで国は東京一極集中是正と言いながらも、一極集中は是正されず、経済原理から集積の経済による一極集中が進んだが、東京の出生率は全国、最低で、このままの仕組みでは、人口の再生産が機能しない。東京に比べ地方の出生率は高いので、地方の就業機会や若者定着率を高めて、日本全体の人口の維持を図ると言う様な、全体の基調が必要なのではないだろうか。

沖委員

○自分が育った土地を大事にするというのは原体験、幼児の時に体験したものがその人の性格を作り上げていく。そこをもう少し我々は考え直さなければいけないのではないかと。異世代の方々が一つのコミュニティを作る、そこには子どもが生まれて赤ちゃんの声がする、というのがポジティブな考え方につながっていく。

佐藤委員

○人口が減少しているという中で、経済力というのは労働力資源量とも大きく関係しているが、農業という産業は、65歳でリタイアして帰ってきた人も重要な労働力になる。地域の人たちがサポートするようなシステムを作れば、全く価値を生まなかった人たちが貴重な労働力資源に変わる。そういうシステムづくりを、地域活性化のなかで取り組んでいくという視点が必要ではないか。

○日本全体が弱体化してきている根本には、コミュニティ、地域社会の人間関係の結びつきの弱さとか、助け合いの精神だとか、そういうものが弱体化してきていることが一番大きな要因ではないかと思う。高齢者が単なる介護の対象ではなく働けるようなシステムを作れば、実は強力な労働力資源に変わりうるのだということ、そういう社会のシステムをどう作っていくかというのはすごく重要だと思う。

戸田委員

○1 ページの基本戦略のプロジェクトは、現在のプロジェクトが書かれている。整合性がきちんと取れているかどうか、基本戦略としてこれはどうか、というものも見られる。また本当に基本戦略の下で現行のプロジェクトで足りているのかどうか、おそらく足りていない。具体的な提案まではいかないとしても、方向付けはきちんとやっておくべきだと思う。

3) 今後のスケジュールについて

事務局より資料3説明

3. 閉会

以上